

リヨンに渡った三人の先駆者 その2

リヨンでの三人の動静を伝える資料としては佐倉の渡仏報告書、吉田の到着第一信があるが、四方呉堂による「織界の隠士佐倉常七君伝」(大日本織物協会会報一二〇〜一二二号掲載―明治二九年)は出色のものである。

『君等同行中の一人か記せし廿五年以前の洋行日記図らず廿五年以後の今日に於て余の手に入りたり……』と付記されており、佐倉の報告書よりはるかに記述は正確である。

彼らは仏語教師レオン・ジュリーの添書を携えて、トロウサン一番地にルイ・リスレイを訪ねるが、氏名が誤記されていて果たせない。ようやく一週間後、コルスモラン五六番地の転居先にルイ・シスレイを捜し当てる。だがそこで機織慣習を始めたのではない。



当時彼らが持帰ったリヨンの地図

(財)西陣織物館蔵

『君等「ルイシスレイ」の添書を以て、里昂「オルドウカリキ」六十三番リガールに通学す』と四方呉堂は記している。リガールは無地織を製織する有名な機業家、当時琥珀織を産出していたとある。吉田の第一信では、シスレイの許で伝習したような印象を受けるが、シスレイは単なる紹介者に過ぎない。

『ルイシスレイ』君等に命じて、毎月謝金各六十「フラング」を納めしめ、又食費として各百「フラング」を任佛しめたり。蓋し君等、未だ彼の事情に通ぜざるを以て、一に「ルイシスレイ」を疑はず……』とあるように三人はすべてシスレイに相談していたと情勢判断される。しかし当地で邂逅した坂上氏が調査したところ、シスレイは謝金六〇フランのうち四〇フラン、食費一〇〇フランのうち三〇フランを横取りしていることが解つた。しかもリガール工場での労働は午前八時から午後八時までと厳しく、機織も詳細に教えてくれなかった。そこでリガールの許を辞し、一カ月一五フランでコルスモランに一戸を借り、千二百口ジャカードを購入、月謝二〇フランで教師を雇ってから成果が現われたという。彼らが苦闘したコルスモランのあたりは、今は住宅地となっていて、当時の面影もない。

(福本武久)